



男嫌い。吉行理恵

男嫌い
吉行理恵

新潮社版

男嫌い

一九七五年五月二五日 発行
一九七五年九月二五日 二刷

著者 吉行理恵

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一一一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷 凸版印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 八〇〇円



© 1975 Rie Yoshiyuki
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

連作短篇■男嫌い■目次

寂しい狂い猫 7

味噌菌 23

オートバイ 41

眠る花 57

女友だち 75

縊死 93

逝春

109

暗い夢

125

想い出

141

読書会

159

幽香

175

マーガレット

191

装 幀
本文挿図

金井久美子

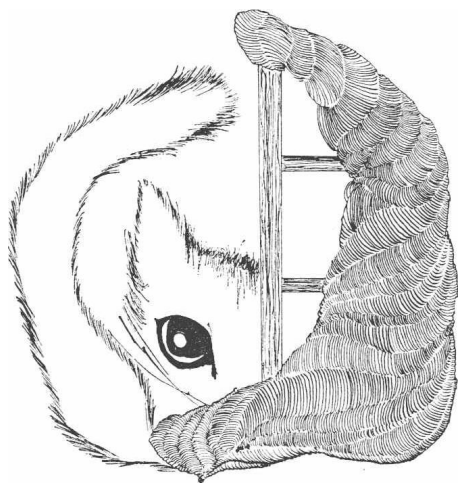
〈連作短篇〉

男

嫌

い

寂しい狂い猫



私の手許に無名の女性が書いた本がある。題は「寂しい狂い猫」という。

『寂しい狂い猫』は、十年前に出版され、とくに絶版になっている。この本は世間に受け入れられなかったようだが、その理由は私にもわかるような気がする。

この著者の北田冴は私とはそう遠くない距離に棲んでいるらしいが、それ以上のことは知らない。

*

*

冴は六十六歳の痩せた老婆である。冴には美しい姉がいる。冴はしみや皺のために顔が茶色くみえるが、姉は四十代にしかみえない。冴には姉妹に間違えられる母親もいる。母親は百歳に近い。

冴は詩を書いていた時期があった。その後、小説を書きはじめたが、続かなかった。そのうち、詩も発表しなくなって、忘れられた。

なぜ、冴は流行作家になれなかったか。力量も足りなかったが、〈男〉を書くことができなかったからだ。

冴は二十代の一時期の出来事が甦ってきて、深夜、ふいに眼が覚める。それはわざとばかりで映し出す映像のように浮かんできく。——あんな人に会わなかったら！ いやな人だったわ、きたならないことばかりして。また私、人のせいにする。言いわけなんてだめよ。尼さんにならなければいけないのかもしれない。

しかし、冴は、それから先に進んで考えようとしなない。そんな自分を——薄汚れている、と思う。すると、タドンのように塗り籠められてしまう。冴は唸っている。そのとき、少し離れて、凝視^{みつ}めている大きな灰色の猫の存在に気がつく。——「どうしたの？ 恐いのかい」って、この猫、訊ねているのかしら。「僕はちっとも恐くないよ」と言っているのかしら。それとも、「僕がここで暮らすようになったのは四年前だし、それに僕、昔話って好きじゃないんだよ」と言っているのか——。

灰色の猫に冴はお礼を述べた。

「ありがとう。あなたの威厳のある態度を視ていると、元気がでくるわ」

灰色の猫は尊敬されるととても喜ぶ。このようときだけ冴の傍に潜り込んで眠る気になる。

朝になる。灰色の猫が鳴いている。

「御飯にして、窓を開けて、いい天気らしいよ、朝風呂に入りたいよ」

「もう少し待ってよ。昨日、よく眠れなかったのよ」

「冴ちゃん、日光浴が猫にとってのお風呂なんだよ。こんなアパートの四階に閉じこめて、外に出してくれないんだもん」

「ぶつぶつ言わないでよ。外に出してあげたとき、腰を抜かして這って歩いたじゃないの」

「御飯にして」

「待ちなさい」

一時間後に冴は眼を覚ます。灰色の猫はまだ眠っている。窓を開けると、日の光が差し込んでくる。コーヒーを沸かし、灰色の猫の好物の蕪もろの葉を煮る。日の光が、窓辺に坐っている灰色の猫の脇腹を桃色に染めている。

冴は掃除をはじめる。

「タラタッタラ 駆け足 タッタラタ

学校のまわりを タッタッタ タッタ

先生もシャツ一枚で 元氣よく

親馬のようにタッタラタ

足並揃えてタッタッタ

あら、この歌、やな歌ね。どうしてこんな歌、想い出したのかしら。小学校のときに習

ったんだわ。こんな歌教えるから、私学校が嫌いだったのね。学校のまわりを足並揃えてなんて、ぞっとするわ。

タラタッタラ 駆け足 タッタラタ

足並揃えて タッタ

冴の音程は狂いっぱなしだ。

「なんて、なんていやな歌」

灰色の猫は昼の眠りを遮られ、疲れた顔をしている。

「アイアムソリー」

「イヤ」

と鳴く。

姉が訪ねてくる。

「冴ちゃん、元気？ フルーツサンドイチ買ってきたの。私、このごろ、これ気に入ってるの」

冴と姉は想い出話をはじめ。ロンドン、パリ、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコを旅したとき、姉が三十八歳、冴が三十四歳だった。

出発までの四、五日、冴は掃除ばかりしている。——飛行機が墜ちないとはかぎらな

い。冴が忙しいので、大きな灰色の猫はイライラしている。普段は慎重すぎるほどであるが、イライラしていると、なにをするか自分でもわからなくなる。

冴が湯舟につかっていると、灰色の猫がとびこんでくる。

「あ」

湯舟からとびあがり、出て行く。灰色の猫は手足とお腹を少し濡らしただけである。

——湯舟の縁まで来た猫はいたけど、この猫は普段は近づかないのに。でも、猫って泳げるのかしら？ 今のジャンプの素晴らしかったこと。

「じゃあ、行ってくるわよ。二十日間は留守にしますからね」

冴が言うと、灰色の猫は清潔なタオルをたたんで入れた箆笥の引出しの中に坐り、——こんな人、早く出掛ければいいのに、という表情をしている。冴が引出しを開けたとき、灰色の猫が素早く入りこんだため、引出しはそのままになっている。

羽田空港で、姉は見送りの五人の男たちと談笑しており、少し離れ、冴は英語の単語を暗記している。

スピーカーが発音を知らせている。冴が姉の傍に立つと、

「妹は恥しがるから、ここにいないものと考えてね」

と姉が言い、冴も五人の男たちも笑った。冴がにこっとして男たちに軽く頭を下げると、男たちもそうする。

「ご姉妹ご出発！ 万歳」

男たちの一人が叫び、笑い声が沸く。

姉は、もとグループサウンズのH君から蕾の薔薇を贈られた。それは、日航機の中で枯れかけたが、ロンドンのホテルでコップに活けると、息を吹きかえし、美しく咲きつづけた。

翌日の早朝、冴と姉はヒースロー空港に到着した。二階建のバスに約一時間乗って、ロンドン市内に向かう。しばらくすると、あたりに緑が多くなる。畑の中にレンガ造りの家が見えてきたとき、

「猫よ」

冴が前の座席の姉に声をかける。大きな黒猫がゆっくりと畑を歩いて行く。

「こんなところで猫と暮らしたいわ」

と、冴が言う。

日本人に会うと、「学生さん？」と訊かれる。姉は日本でも、二十三、四にみられたが、三十過ぎの女が二人で外国旅行するとは考えられないこともある。冴は姉と一緒にいるときはサングラスをかける。姉の美しさにひきめを感じているせいだ。姉が美しく、冴がそうでないということはどうしようもない事実なのだ。だから、買い物をするときはどちらも疲れてしまう。姉は流行をうまくとりいれた洒落た服装を好むが、冴には地味でごく普通の格好しか似合わない。

地下鉄のスローアンスクエア駅で降りると、広場がある。